

現代青年の傷つけ合うことを回避する傾向についての研究

(結果報告)

岡田 努

(金沢大学人文学類)

調査にご協力頂きましてありがとうございました。全体的な結果がまとまりましたのでご報告いたします。なお、この結果は、2008年11月以降に質問紙調査をお願いした高校・大学での結果をまとめて分析したものになります。5月までの調査結果に基づいた暫定報告をすでに行っておりますが、さらにその後のデータも含めてのご報告になります。

調査の目的

現代の若者の友人関係は、深い関わりを避け表面的な円滑さをつくろう傾向にあるとしばしば言われています。それによって相手から嫌われたり傷つけられたりすることを避け、自尊感情の低下を防いでいると考えられています。この調査では、以上のことを検証したものです。

方法

調査にご協力頂いた方

高校生 234名 (男子 67名, 女子 167名 15~18歳 平均 16.21歳)

大学生 227名 (男子 103名, 女子 124名 18~25歳 平均 20.07歳)の合計 461名。

主な調査項目の内容

- 1) 友人関係で傷つけ合うことを避ける傾向についての質問(傷つけ尺度)
- 2) 他者から受け入れられている・拒絶されていると感じる傾向についての質問(杉山崇・坂本信士が作成)
- 3) 自尊感情(自分自身を尊重できる気持ちの高さ)についての質問(山本真理子・松井豊・山成由紀子が邦訳)

結果と考察

(1) 傷つけ尺度の分析

傷つけ尺度について「因子分析」と呼ばれる方法によって、調査結果に基づいて項目内容を分類しました。その結果、「友だちからバカにされないように気をつける」など、友だちから傷つけられたり、恥をかくことを避けようとする傾向を表す項目群(傷つけられ回避)、「自分の内面的なことは話さないようにする」「友だちの内面に踏み込まないようにする」など、お互いの内面に立ち入らず距離をとった関わりを表す項目群(距離確保)、「自分が悪いと思ったらすぐにあやまる」など礼儀をわきまえた関係の取り方を表す項目群(礼儀)、「友だちの気分を害するようなことを言わないようにする」「友だちを傷つけないようにする」など相手を傷つけないよう気を遣う項目群(傷つけ回避)に分けられました。

(2) 学校段階による違い: 表1に、各項目単位での平均得点(1~5点で得点が高いほどそれぞれの性質を強くもっている)を示しました。統計的には、友人関係のうちの傷つけられ回避と距離確保で高校生の方が高く、自尊感情は大学生の方が高いことが分かりました。年代が高くなるほど、傷つけられることを恐れたり、必要以上に距離をとることがなくなり、自分を尊重できるようになる、対人関係場面での適応スタイルを身につけていくと言えるでしょう。

表1 各質問内容の項目あたりの平均と学校段階差

		人数	平均	
傷つけられ回避	高校生	233	3.32	高校 > 大学
	大学生	226	3.04	
距離確保	高校生	233	2.95	高校 > 大学
	大学生	225	2.58	
礼儀	高校生	231	3.81	
	大学生	226	3.83	

傷つけ回避	高校生	233	3.38	
	大学生	226	3.33	
自尊感情	高校生	232	2.96	
	大学生	224	3.12	高校 < 大学
被受容感	高校生	231	3.27	
	大学生	226	3.30	
被拒絶感	高校生	233	2.38	
	大学生	225	2.37	

(3)それぞれの質問内容の関連についての検証

表1の質問内容それぞれがどのように関わっているかを共分散構造分析という方法を用いて分析したところ図1のような関係にあることが分かりました。

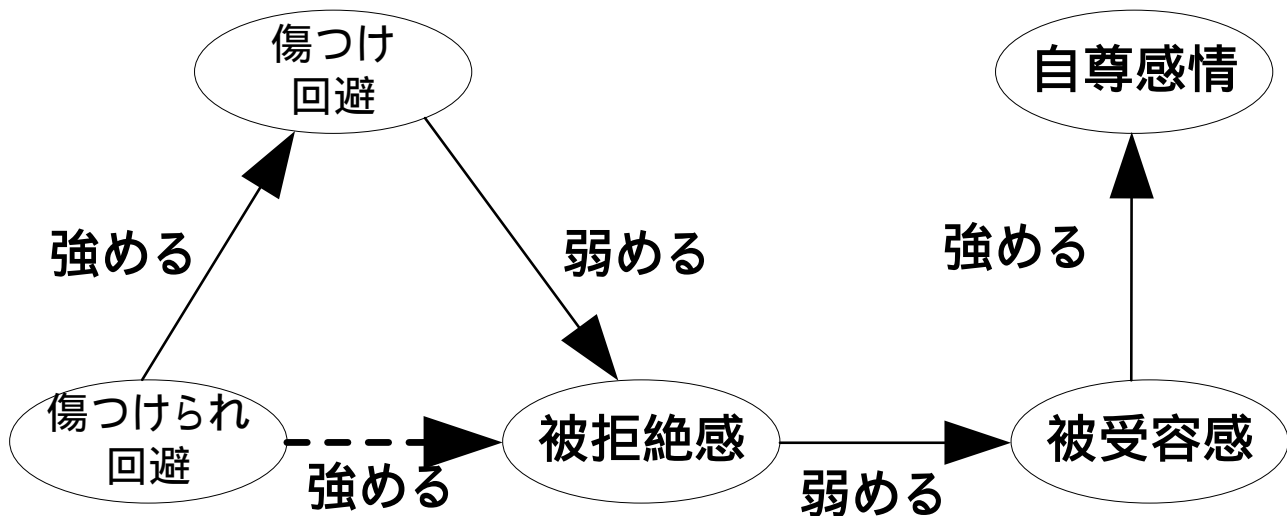


図1 傷つけ合うことの回避から自尊感情へ至る関係

つまり、自分が傷つけられることを恐れ回避することが、相手を傷つけないよう配慮を促し、それによって、自分が拒絶されているという感覚(被拒絶感)を弱めます。しかし、相手を傷つけないよう配慮しない場合は、他人への怖さはそのままなので拒絶されるという感覚を逆に強めてしまいます(図の点線)。拒絶されているという感覚は、相手から受けいれられているという感覚(被受容感)を弱める作用があります。逆に言えば「拒絶されている気持ち」が低ければ、受容されているという感覚が強くなります。そして受容されている感覚は自尊感情を強めます。

このように、相手に対して傷つけないよう配慮することを通して、若者は自分自身を尊重できるような気持ちを得ていることが分かりました。

引用文献

杉山崇・坂本信士(2006).抑うつと対人関係要因の研究:被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討 健康心理学研究 19,1-10

山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982).認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30,64-68.